

## *Poétiques de la Renaissance:*

*le modèle italien, le monde franco-bourguignon et leur héritage en France au XVI<sup>e</sup> siècle*  
sous la direction de Perrine Galand-Hallyn et Fernand Hallyn, préface de Terence Cave,  
Genève, Droz, 2001.

伊 藤 玄 吾

フランス文学の16世紀が詩の時代であり、詩とは何かをめぐって、またいかなる詩がフランス語において可能であるかをめぐって多くの詩論が書かれたことは周知の事実である。もちろん、本書の序文でテレンス・ケイヴが注意を促しているように、16世紀のすべての言説空間において詩的思考－「非」科学的なアナロジー的思考の網の目が張り巡らされていたわけではないにせよ、詩という表現形態が自然科学、宗教、政治思想、教育その他の相当多くの分野に関わっていたことは事実であり、詩を擁護するにしても弾劾するにしても、とにかくそうした議論が成り立つ基盤として、それぞれの論者が詩というものの社会的、現実的な効力をそれなりに信じていたということがあった。

ルネッサンス期の文学論についての研究といえばまずB・ワインバーグの大著 *A History of Literary Criticism in the Italian Renaissance* 『イタリア・ルネッサンス文学批評史』およびそのアンソロジー *Trattati di poetica e retorica del Cinquecento* 『16世紀の詩論および修辞論』がまず頭に浮かぶ。しかしながら膨大なテキストを網羅したこれらの著作とここでとりあげる *Poétiques de la Renaissance* は決して同じ方針をとるものではない。本書では一応16世紀のフランスの詩学が中心になっているものの、それを独立した形で細かく記述していくのではなく、詩学というものを様々な分野との相互影響関係の網の目の中にあるものとして捉えようとする。構成としては、第一部において詩というものの本質、諸芸術の間における詩の位置についての議論を扱い、第二部においては詩と知の関係、またその社会的、宗教的、倫理的側面についての議論が扱われ、第三部では言語芸術としての詩のあり方そのものをめぐる議論、特に *imitation* の概念、*style* の概念が検討され、さらには言語芸術としての詩と造形芸術および音楽との関係についての16世紀のさまざまな議論に焦点が当てられている。

また本書は16世紀のフランスを中心としつつも、15世紀のフランスおよびイタリアの詩学について、従来の類書では考えられないほど（全体のなんと3分の2近い）多くの紙面を割いて論じている。制度的な理由から中世、16世紀、17世紀、18世紀の専門という形でいわゆる世紀別の思考に慣れてしまっている我々の陥りやすい罠は、自らの属する世紀のありようを一つの到達点もしくは完成体と見、それ以前の時代の様々な文学的意匠をそこに至るまでの単なる過程として描き、結果的に目的論的な記述をしてしまうことである。特に中世－ルネッサンス、バロッ

クー古典主義といったように、自らの扱う時代とその前の時代のコントラストが強調されている場合などには、こうした傾向が強く見られる。本書においてはそうした傾向を避けるためのひとつの有効な手段として、それぞれの時代の記述はそれぞれの時代の専門家に任せバランスをとっているのである。

さらに本書のもう一つ重要な特徴はネオラテン文学への目配りが利いていることである。16世紀詩学に関する旧来の研究の多くは、フランス語での詩作に関わる詩論に限ったものであったが、実はそれでは当時の文学制作の状況の半分しか見ていることにならない。16世紀フランスで書かれた最大の詩論は、デュ・ベレーのものでもなく、トマ・セビエのものでもなく、ロンサールのものでもなく、J・C・スカリジェの詩論 *Poetices libri septem*『詩学7書』であり、それはラテン語での詩作活動を念頭においてラテン語で書かれているのである。近年のネオラテン文学研究の進展によってますます明らかになってきたことは、ラテン語での著作とフランス語での著作がひとりの詩人の創作活動においていかに共存していたかを理解せずにルネッサンスの詩学を論じることが不可能であるということだが、本書はそうした研究の流れを良くとらえている。それもそのはず、本書の編集の中心となり、多くの部分を執筆しているのが現在ソルボンヌおよび *École pratique des hautes études* で教鞭を執る気鋭のルネッサンス・ネオラテン文学研究者であるペリーヌ・ガラン＝アラン Perrine Galand-Hallyn とそのパートナーであるフェルナン・アラン Fernand Hallyn なのである。彼らの仕事の特徴の一つは、彼ら自身が極めて博学でありかつ堅実な文献学的研究を積み重ねていることに加え、他の多くの分野の研究者との交流を豊かに取り入れていく点にあり、そうした研究スタイルが本書の中で見事に実を結んでいるといえよう。

全体で800ページ近い大部の本書からここではルネッサンス詩論において極めて重要な概念である「Imitation（模倣）」についての章（第3部第1章）を例にとりその特徴を捉えてみたい。本書ではほとんどの章が、基本的に3つのセクションからなっているが、この章でも第1セクションで「模倣」についての15世紀作家の議論の諸相が15世紀文学研究者によって30ページほど論じられ、次に第2セクションではイタリア15世紀の状況について25ページほどのイタリア人研究者の論文があり、第3セクションとして16世紀研究者による30ページほどの論文があり、最後にこのテーマに関する当時の重要な詩論を中心に20ページほどのアンソロジーが編まれている。

15世紀という時代は一般の文学史の中では極めて記述が少なく、フランソワ・ヴィヨンのような突出した詩人を除けば、専門家以外の人々にとっては一見文化的空白のようなイメージがあり、16世紀研究者でさえ15世紀は直前の時代であるにもかかわらず、その文学状況について全く無知なことが多い。しかし「中世の秋」15世紀と「新生」・「再生」の16世紀という見方に囚われているかぎりなかなか見えてこない文学的活動の現実をよりよく捉えようというのが本書の特徴でもある。「模倣」の問題についていえば、確かに15世紀には16世紀ほどまとまった形での理論的な考察はなされていないが、考察そのものがなかったわけではない。「良く書く」ということと「優れた例に倣う」ということの間に生まれる緊張感、そして母国語作品と優れた外国語作品の競合関係がもたらす緊張感は常に作家たちにとって重要であって、それについてここでは2人

の15世紀文学専門家によってクリスティーン・ド・ピザンやジャン・ルメール・ド・ベルジュなどの15世紀の代表的な作家の例を中心に論じられている。

次に15世紀イタリアにおける「模倣」をめぐる議論の状況がイタリア文学の専門家によって手際よくまとめられる。キケロの語彙と文体を唯一のモデルとする純粹派、もしくはキケロ主義と、逆に蜂がいろいろな花から優れた蜜を集め独自の蜂蜜を作り上げるように、異なる様々な典拠から最良のものを選びそれらを巧みに混ぜて自己の文体を作り上げることを目標とする混交派の対立に至る過程がよく整理されている。

それに続く16世紀フランスのセクションにおいては、イタリアで隆盛を極めたキケロ主義への反駁としてのエラスムスの著作がフランスでいかなる反響を得たかに始まって、当時のいくらかの極端な立場が紹介されはするものの、それらを対比的に、教科書的に記述するというよりは、むしろ当時の理論家や詩人の実際の議論において「純粹」主義と「混交」主義が絡みあって複雑な様相を呈しているという事実が強調される。ウェルギリウスを唯一の「純粹な」詩的模範といいつつ、同時に彼の作品そのものを様々な異なるレベルの語彙と文体の混合体として称賛するような態度はその一つの例である。この辺の事情を16世紀最大の詩論といえるJ・C・スカリジェの *Poetices Libri septem* を中心にさらに詳しく扱っているのが後半部で、このJ・C・スカリジェの大著の批評版作成およびドイツ語訳を行っているL. Deitzが担当している。スカリジェによって引用される古典作品の選択やその分析方法が当時の文脈の中でどのような意味を持ったかについての詳しい調査と研究に基礎付けられたこの論考は、我々を16世紀詩論研究の最前線に誘ってくれよう。

さらにこの章の論述をよく理解するために最後に置かれたアンソロジーには、現在ごく限られた図書館で手稿の状態でしか読めない貴重なテキストも多く含まれており、また引用されるラテン語のテキストは編者によってすべてフランス語に翻訳され、専門家でなくとも十分利用できるように考えられている。

このように極めて資料価値の高いテキストを集め、バランスの良い論述を行っている本書の中で唯一惜しまれる点は、ギリシア語のフォントの質が非常に悪く、本文の内容のレベルの高さと奇妙なアンバランスを作りだしてしまっている点である。16世紀に出版されたギリシア語テキストの美しい書体を日常的に目にしている研究者たちにとって、5世紀後の印刷術の後退？を目にするのは実に皮肉なことである。様々な出版上の事情があるのであろうが、本というものの matériel な側面へのこだわりが研究と全く無縁のものではないことは16世紀研究者ならば誰でも知っていることであり、残念なことである。

ともあれ旧来に比べフランス・ルネッサンスの詩論を極めて広いパースペクティブから整理した本書は、16世紀詩論研究の最前線についての概観を得るには最適の書であり、16世紀フランス文学の専門家に限らず、15世紀文学の研究者たち、イタリア文学その他のヨーロッパ文学研究者たち、さらには広く詩論に関心を持つ人々すべてにとって極めて有用な書といえよう。